

0-054

急激な内傷により発症した急性腰痛2例の鍼灸治療

○吉岡 広記^{1,2}、山田 恵美^{1,2}

1) 日本鍼灸研究会 2) 吉岡鍼灸院

【前言】山田報告症例男性の内傷による急性腰痛を報告する。

【症例B】所見：X年7月下旬、午前、急に腰部に劇的な鋭い痛みが出る（不用意に動くとき起立不能に陥りそう。久坐により一時的に悪化。後屈≦前屈。左≧右）。手足温、大小便有り。気虚寒湿のやや逆、肺経虚證。

経緯：前日、徹夜の後、会議に臨み（終日）、夜は目がさえて未明まで寝られず。起床後しばらくして発症。なお、同年4月（症例A：山田報告）以降に腰痛はなく、虚燥痰燥で推移。

治法：内傷と判断。本治法は陽虚の解消を目的とするが、脈證がやや逆であるため、肺経と大腸経の兪穴と経穴の補法とした。標治法は症例Aと同じ。

【結果】気燥痰燥の順となった。毎日治療するも脈證はそのまま推移し、痛みに顕著な変化は見られず、4日目の治療後に虚燥痰燥となり翌朝に消失した。

【考察】症例Aと同じく日頃の陰虚から逆證の陽虚への急激な転化が背景と考えられるが、体を冷やしたのではなく、不眠不休での久坐と知的作業による点で異なっている。陰虚に復するまでに要した期間の相違や陰虚に復して以降の痛みの消失する時間差からも、内傷（内気の損傷）が主證であり、外因による症例A（外形〔形気〕の損耗）と似て非なる状態であることが認められた。なお遅脈に加えて気口が瀉脈であることから、陽虚の進行がうかがわれ、ごく短時間に極度の内傷をしたことが推定された。また、1ヶ月後にも同様の状況下で同症状を発症したが、脈證は気虚寒湿の順と異なり、初回の治療後（肺経と胆経の兪穴と経穴の補法）には虚燥痰燥に戻り翌朝に消失した。これにより、本例では陽虚の程度が痛みに影響していることが確認された。なお、夜間痛もなく大小便や手足の寒熱に変調が見られないのは、長期の内傷でも風や寒による外傷でもないためと考えられた。

【結語】症状が同じであっても、またそれが同一の患者であっても、発症の経緯や病の推移、肥瘦、脈状などの所見から内外傷に分けて対応していく必要性が示唆された。